山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要第13号（2002.3）

児童臨床における「心の世界」へのアプローチについて

――力動感・能動性・間主観性――

木　谷　秀　勝

The Approach of the "Inner World of the Child" in Child Psychotherapy
－Vitality Affect, Activity and Intersubjectivity－

Hidekatsu, KIYA
(Received November 6, 2001)

緒言

子どもへの心理療法は，近年の小児虐待，PTSD（心的外傷後ストレス障害）や増加する不登校等の社会的問題の増加も関連して，多くの研究報告が出されている（藤森,1999,厚生労働省,2001）．その場合，大人への心理療法と異なり，子どもを対象とする際にもっとも難しい点は，子どもがもつ言語化の限界であることは，従来から指摘されている．

その問題に対しては，多くの研究者の実践や非言語的アプローチ技法の発展(村瀬,1997,西沢,1999，山中,1999）により，子どもを対象とする心理療法の可能性は拡大しつつあると考えられる．

そこで，今回の報告では，こうした臨床的な視点に発達心理学や近年研究が盛んに行われている乳幼児精神医学の知見を加えることにより，子どもの「心の世界」へのアプローチのさらなる可能性について検討することを目的とする．

1．発達を理解することと「心の世界」を理解することとの関連について

木谷（1999）は，プレイセラピーの基盤となる「あそび」が治療的意味をもつためには「大人との間に内的世界と外的世界をつなぐ第三の世界（河崎の「内面領域」(1984）であり，ウィニコットの「潜在空間」(1971)）を作ること」と同時に「そこで生じる激しい揺れ動きの重要性をどのように周囲の大人（ここではカウンセラー）が理解するかが重要である」と指摘した．しかしながら，その時点では，その「第三の世界」，つまり子どもにとっての「心の世界」がどのような過程で形成されるかについては言及できなかった．

そこで，今回は最近の発達心理学の知見（子どもの発達を理解すること）を踏まえながら，「心の世界」の形成とその変化（子どもの「心の世界」を理解すること）との関連性について検討したい．その際のキーワードとして，副題とした「力動感」,「能動性」,「間主観性」の３点から考えたい．

１）力動感

スターン（1985）は，乳児の発達に関して，乳児の主観的体験としての「自己感」とい

う概念から検討を行った．その結果見えてくる乳児の体験世界はスターンや渡辺（1987）が指摘するように活発な状態であることが明確になってきている．その活発さを背景で支える感覚が，Vitality affectである．この「Vitality affect：力動感」（小此木達(1989)の訳では，「生気情動」とされているが，ここでは鯨岡の訳をあてる）は，「力動的なある感じ，生気を帯びた広義の情動」とスターンは定義しており，さらに乳児が体験するときの「活性水準」，「活動性のパターン」，「リズム」といった様相でこの力動感を捉えることが可能であり，それらを一つの統合性をもった感覚として感じ取るのが，身体であると述べている．

つまり，ここで意味する「力動感」とは，子どもの「心の世界」を情緒的に豊かにする準備性として，重要な役割をもつと考えられる．

さらに，スターンはこうした「自己感」のそれぞれの感覚は，他の児童心理学の発達論に見られるような階層的な発達ではなく，生涯にわたり，その個体に影響すると指摘している．したがって，この「力動感」の形成とその変化は，子ども達の一時的な変化（身体的，精神的）を促すのではなく，長期にわたり影響する重要な要素であることも認識する必要がある．裏返して考えれば，子どもと関わる大人（カウンセラーと考えてもいいが）との心的交流により，子どもの「力動感」が活性化される理由の一つとしてこの大人自身がもつ「力動感」による効力が重要であることも理解できる．またこの「力動感」を基礎とした「心の世界」の豊かさも形成される．

2）能動性

最近のアフォーダンス理論（佐々木,1994，三嶋,2000）では，個体（本論の文脈では身体感覚や身体知覚として捉えられるが）の環境に対する能動的な関与について指摘されている．

特に，三嶋は人間（動物も含めて）は「多様な環境の中で能動的に振る舞う動物」と考え，同時に「私たちが何か新しい行為を身につけるということは，すでに獲得した行為に，新しい行為を単純に付け足すことではない．それは私たちの全身を，その時々に出会う環境に対応して新たにつくり替えることとして考えた方がいいかもしれない．私たちが「柔軟」であるということは，私たちの身体がいつも「新鮮」であるということなのだ」と述べている．

こうした考え方は，単なる認知発達としての能動性という捉え方よりも，そのメタ認知に存在する知覚世界でも，さらに能動的に環境への柔軟な適応が行われていることを証明しており，こうした能動性の活性化が，子ども達の「心の世界」の柔軟性と再構成を可能にしていると考えられる．

逆に，環境からの課題は時に圧力により，「柔軟」さと「新鮮」さを見失い，身体感覚の病理的な現象を来してしまうこともあると推測できる．

3）間主観性

鯨岡（1997）は，乳幼児期からの母子関係の発達研究の方法論として，この間主観性の考え方を中心に展開している．その中で，間主観性についてはけっして形而上的なレベルではなく，むしろ「常識の他にも，制度や慣習など自明なものとして人びとの主観の中に潜り込み，個々の主観の働きを枠づけているものすべて」を主観性と捉え，我々の日常生活における「他者とのあいだの繋がれた状態」として間主観性を位置づけた．

また，鯨岡は「人が人を分かるということ」の問題を間主観性の視点から次のように述

べている.「相手の何かに基づけられて，それを通して何らかの「分かる」がもう一方の主観の中に生まれ出るならば，それが対人関係を動かしていくのに十分」であるとして，その「分かる」ことを支える点として，「あたかもその気持ちがこちらに通底してくるかのように」こちらの受動性を意識させることと，同時に「「いま，ここ」における「解釈」」としてのこちらの能動性も重要であるとしている.

そして，この「分かる」体験を通して相互に揺れ動かされた対人関係から，「次に何を「する」かが決まる」として，初期の子どもと養育者との関係や重い障害をもつ子どもと教育者との関係（鯨岡,2000）といったさまざまな人間の相互関係を新たな関係性に展開させるためにはこの間主観性の捉え方が不可欠であることを強調している.

このように，子ども達の「心の世界」を単なる幼稚な主観の世界としてではなく，相互理解（最初は母親やカウンセラー）を通して，新たな関係性（広がりをもつ対人関係）へと連続的に展開できるようにするためには，こうした間主観性が重要となるのである.

2．児童臨床における「心の世界」へのアプローチについての一つの仮説

以上のような最近の理論を臨床的に応用することによって，アクスライン（1969）が指摘するような，来談児の潜在的な成長力を受容・共感するだけが強調されるプレイセラピーでなく，カウンセラー自身の「力動感」,「能動性」,「間主観性」を積極的に活用することが児童臨床において重要となってくると十分に理解できるだろう.

したがって，この考え方に基づくと，児童臨床における「心の世界」へのアプローチとその変化の可能性とは，次のように考える（一つの仮説として）ことができる.

プレイセラピーでは、力動感を伴う身体活動（具体的には，あそびであり，言葉活動も含まれる）を通して，また，カウンセラー自身の力動感も積極的に活用することにより，クライエントはカウンセラーとの相互関係を安心できる環境として体験する．その体験の繰り返しを通して、クライエントは能動的に「心の世界」の柔軟性を再構成することが可能となっていく．しかも，そこにカウンセラーが間主観性を重視して関与することは，一時的な二者関係の構築にとどまらず，さらなる対人関係への可能性を広げることにつながると考えられる.

3．事例検討

そこで，この考え方（仮説）を臨床的に検討するために，ここでは２つの事例を呈示する．ただし，呈示にあたっては，プライバシー保護が可能な，終結後かなり時間が経過した事例を呈示することと，事例の流れを妨げない範囲内で事実関係を修正して呈示することとする.

なお，文中の表現で，筆者はThと略し，会話については＜　＞はThを，「　」についてはクライエント及びその家族を示すこととする.

（１）事例：Ａ子（６才）

１）主訴：不登校

２）家族構成：父親；会社員．他地方への単身赴任中．母親；専業主婦．自責感が強い．姉；７才，Ａ子とは双生児のような感じ．Ａ子の４人家族

３）生育歴及び来談経過：妊娠時，出産時は特に問題なし．幼児期前半までの運動発達，言語発達や既往歴に問題なし．１才過ぎから寝る前にタオルを移行対象としていつも手に

していた．３才頃から外遊びは活発で，近所の女の子ともよく遊んでいた．幼児園では，年長になり，１，２学期に行き渋りが見られた．

小学校入学後１週間経過して，急に朝ぐずるようになり（理由はわからず），母親が一緒ならば，教室に入れる状態が続き，母親も仕方なく，一日教室の後ろにいる状態となる．朝になると，「疲れた，眠い」と口にするが，睡眠はしっかりととれており（よく怒っている寝言は多い），朝，身体症状は見られない．そのため，母親としても今後の対応がわからずに来談となる．

４）インテイク面接：母子で来所する．待合室に行くと，母親は不安そうにして，Ａ子は動きたくてむずむずしていた．事実確認の後Ａ子に「家族画」を描いてもらう．最初に母親を描き，次にＡ子，姉，最後に父親．そこまで描くと「あっ」と言って，「お母さんだけ離れている」とＡ子と手を結ぶ．また，学校で楽しいこと３つを書いてもらうと（１）うんどうかい，（２）おひるやすみ，（３）（ずっと考えて）ずこう　と書く．その後，元気になり，机の下をもぐったりと活発な動きを見え始める（時々指しゃぶりが出ていた）．

以上の点より，強い母子分離不安が見られ，母親自身も精神的な疲れと自責感があり，現状は相互関係がマイナス面に傾いている状態と判断された．したがって，今後は母子合同面接の方針とした（スタッフの関係上の構造）．

５）その後二回は合同で行う．母親の焦りとＡ子の退行状態が強くなるが、母親はその状態を受け入れることができなかったため，母親の話をゆっくりと聞くために、３，４回目では母子分離を行う．分離では，３回目よりも４回目に不安を見せたが，分離して面接を行うことはできた．その間，母親からはＡ子や父親への攻撃的な発言が続くが，Ａ子自身はマーラー（1975）の再接近期危機の状態が顕著（３回目でＡ子が作った箱庭からも分離したくても，できない葛藤が表現されていた）になってきた．

したがって，母親自身の安定感を図るために，母親が一歩先に学校から帰る方法について話し合い，２週間試すこととした．その結果，５回目では，Ａ子は機嫌良く学校から帰っては来ても，朝になると「今日も先に帰るんでしょう」と言うようになり，母親もそれに耐えながらも続けることができた．＜一人でいることをいやがるのは，どうしてでしょう？＞と直面化をはかると（やっと母親自身がこうした直面化をしても言語化できる安定感が出てきたと判断したため），以前は買い物のときに姉は母親と一緒で，Ａ子が留守番していることが多かったことが連想された．＜姉妹が逆転していますね＞そうですね．＜今の姿の方が，自然ですね＞と解釈をする．

その後，夏休みに入り，もう一度合同面接に戻す（現実的な事情もあり）が，出校日やプールには友達と一緒に学校に行くことができ始めたことが母親の報告からわかった．その傍らで，Ａ子は夢中になりThの顔や女の子の顔，アニメのキャラクターを書いていたが，その女の子の側に赤く何かを描いていて，急にThに向かって「これ何だ？」と聞くので，＜お化け＞と即答すると「ピンポン」と正解であることを教えてくれる．それがうれしかったのか，すぐに姉の書きかけの絵を取り出して，バス停を描き，その周囲をピンクの線で取り囲んだ．これもお化けとThは判断したので，お化けという大きな不安を治療的に閉じこめるために，Thの提案でそれらの描画を「えほん」として表紙を作り，「おわり」と裏表紙に書いて，１冊の「おばけ絵本」に昇華する形でこの面接を終了した．

その後，夏休みが終わった面接では，朝はぐずっても，母親が教室まで付いて行き，すぐに帰ることができる状態となった．そして，Ａ子は面接室の隣で「笑わないでね」と言

いながら，いろいろなかわいいお化けの絵を書いては，一人で楽しんでいた（昨日から隣の机の女の子と一緒に書いて，遊んでいる）．そのお化けの話から，二段ベッドは止めて，今は３人で寝ていることも報告された．

８回目では運動会の練習も始まり，登校は今までと同じでも，学校での元気さは出てきていた．しかも，Ａ子の方から，「運動会が終わったら，一人で行く」と言い始めたこともわかる．母親としても安定感が出て，自分でやれる自信もついたので，母親からの提案もあり，今回で終結とした．

６）その後の状況：母親からの電話で，運動会を頑張れたこと，そしてその後は元気に友達と学校に通っていることが報告された．

（２）事例：Ｂ男（10才）

１）主訴：自転車からの置き引き

２）家族構成：父親；本児が５歳の時に離婚．その後，再婚している．母親；会社員．勝気だが不安も強い．兄；中２，まじめな性格．本児とはよくけんかをする．Ｂ男の３人家族．小６の５月より大叔母が同居する．

３）生育歴及び来談経過：生育歴については，別の担当者のため詳細不明．今回の来談については，小５の二学期に自転車からの置き引きが発覚し，11月に母子で来談する．別の担当者が母親面接を行い，家庭関係に関して指導するが，Ｂ男が再度問題行動（置き引き）を起こしたために，11月よりThが担当となる．

4）初回面接の状況：母親担当者，Th，母親，Ｂ男で合同面接を行う．本児はしょんぼりして，体を丸めて座っていて，母親から姿勢を伸ばしなさいと注意されている姿が印象的だった．その後，ThとＢ男はプレイルームに移動するが，緊張は強かった．＜背筋を伸ばせって言われてて大変やねえ，ここではシュンとしたＢ男も本当は良い子のＢ男もいろいろを見せて．きっと良い子のＢ男は，背筋が自然に伸びたＢ男だと思うよ＞とプレイセラピーに導入する．最初，卓球を始めると，Ｂ男は自然と背筋が伸びてくる．それを言ってあげるとうれしそうにしていた．

終了後，待合室で二人で待っていると，Ｂ男から「これからも来たい」という希望と，「９月に文鳥が死んでから，悪いことをすると左肩にインコの霊が乗り，重くなる」とぽつんと口にする（誰にも言っていない秘密）寂しそうな姿が印象的だった．

５）面接経過：（次の面接がこちらの都合で２週間後となり）「一回気持ちがムシャクシャして，自分で自分を刺したい気持ちになって」＜先週ここへ来れなかったからかなあ，Ｂ男の思うようにならなくてごめん，でも我慢できたから安心した＞…「けんか，いやすもうやろう」．とだんだん力が入ってくる．終わりかけに崖の下に落ちていったインコの夢を教えてくれる．＜一人ぼっちになったね＞「インコは良い奴」と寂しさを表現していく．

その後５回目までは，戦争ゲームが展開される．３回目では，三輪車に乗り，Thにぶつかってくる．「インコがやれやれって言っている」．それでピストルで戦争ごっこになるが，Thが＜弾がなくなったら休戦＞と電話を置く．４回目では，Ｂ男がピストルをに取りに行くと，突然，「蛇はいや」と逃げ出す．その後の戦争ゲームは激しい攻防と接近戦が続く．それでも，時間を告げると，Ｂ男は「Thと遊んでいた夢を見ていて，急に起こされてムシャクシャした話」を始める．＜急に終わりと言われたのと同じかなあ＞「うん」とThに抱きついたまま階下に下りて帰る．少しずつ安心感が出てきたのか，５回目では前回と逆の方向での戦争ゲームとなり，しかも楽しみながらの接近戦となった．その後，

三輪車にトロッコをつけて交代で乗る．B男は「気持ち良い」と寝た姿勢のまま．交代してThを引っ張ってくれたので＜良い子になったね＞「もっと良い子になりたい」…＜インコは？＞「以前ほど重くなくなったよ」と安定したB男の姿が見え始める．

しかし現実には思うようにいかず，6回目から10回目までは風邪を引いたり，怪我をしたりと不安定な状態が続く．その影響もあり，8回目では，左足を軽く引きづりやってくると，Thに向かって「Thはタコ」と攻撃性を向けてくる．＜B男は？＞と聞くと，「スケバン刑事」と外見は良くなくても，心はいい人の話を始めた．その後は足の怪我もあり，初めて箱庭をする．「戦争」と言いながら，ThとB男それぞれが基地を作り，戦いをするが，最後はB男が水をかけて「水入り」とする．9回目も，頬にひっかき傷を作って来談する（近所の人に以前の悪いことを言う人がいるために，学校にいけない話をしてくれる）．箱庭では「戦争しているところ」，そして「こっちには平和なところを作ろう」ともう一つの箱庭も作る．しかし，「火事，火事」と平和な箱庭を水浸しにしてしまったので，＜平和って言っているけど，これは戦争と同じじゃない＞「あっ，そうか」＜平和なところが戦争で，戦争のところが平和だね＞と言語化する．

11回目以降は安定してくる．11回目では，Thに甘えて来て，外でB男とThとの追いかけっことなる．そして，12回目では，ボール投げをしていて，B男は戸棚のてっぺんに上り，下にいるThとキャッチボールとなる．ニコニコしたB男の表情とインコの話（またインコが死んでしまった）から「二人の天使とともに天国に行くネロ」とB男の姿が重なってくる．13回目では，背が伸びた印象を受ける．現実的な会話も抵抗なく，＜学校は行けてないの？＞「5年生の女の子に嫌な顔をされるし，近所に文句を言うおばさんがいて，その人たちに会うのが嫌だから」…「今は悪いことはしていないのに」と罪悪感との葛藤が強いことが理解できる．

それでも，少しずつ自立に向かい，14回目では，初めて一人で自転車で来談する．「僕の自転車が見えるよ」とオルガンの上に立ち，そのままThの肩に乗る．何回か乗った後，ホワイトボードに口裂け女を書き，さらに「きやのタコ」と書く．すると突然「お父さんに裏切られた」としんみりと話し出す．それをホワイトボードに「おとうさんは裏切った」，「木谷先生のタコ」と書いたので，Thも＜でも，幸せだし，悪いことはしていません＞と返事を書く．「うそ」＜うそつきは泥棒の始まり＞「木谷先生は泥棒の始まり」＜…（返す言葉がないことを表現した）＞「負けたって書くんだよ」＜今はよくなったから天使が許してくれたよ＞「そんな！」とホワイトボードに筆談をして，最後にB男は二人の名前を書き，その上にハート印．そして，「まかせとき」と書いて終わる．こうして安定感を伸ばしていき，15回目で「僕運動会で応援団に入ったよ」とうれしそうに話してくれる．さらに17回目では，「僕，ソフトボールの副キャプテンになったよ．みんなはキャプテンにと言ったけど」＜まだ自信なかった？＞「うん」「今日は友達と約束をしてたけど，ここがあるから…いつまで来るのかなあ」＜夏休みの終わり頃にしようか＞と終結のことを話す．そして，18回目では，ソフトボールの試合ではピッチャーをして活躍した話をしてくれる．卓球，三輪車での追いかけっこ，水場での絵の具を溶かしての水遊びなど，今までやってきたプレイを繰り返して楽しむ．新しい友達もできて，本児自身の自立も安定してきたので，今回で終結とした．

6）その後の状況：中学校入学時に，知り合いの先輩からいじめを受けたために，登校を渋ることが見られたが，学校に調整してもらい，その後は問題なく，登校を続けた．

4．考察

（1）事例を通して

1）A子の事例で重要な転帰となったのは，5回目の面接でA子が描いた「お化けの絵」であった．「お化け」は言うまでもなく，A子の分離不安が産み出した投影であり，同時に不安なA子を一時的に守り，支えていた「閉ざされた関係性」から派生する産物でもあった．それが夏休みに入り，A子自身の力動感が活性化を始まると，友達と学校のプールに行けるようになり（能動性），少しずつ安心できる環境の中で，分離が進むに連れて逆に生じる大きな不安（再接近期危機）として表現したものと考えられる．しかも，その不安をThに向かって，「これ，何だ？」と確認したことは重要である．たぶん，この時点では，不安の強い母親では無理で，どこかで揺れながらも動き始めているA子の姿を間主観的に「分かっている」（とA子が感じた）Thにこのとてつもなく大きな不安を投げかけて来ている．それに対してThも，ただ<お化け>と言語化して伝えたが，実際はA子がもつ大きな不安と寂しさを感じ取りながらの言語化であった．

したがって，「ピンポン」と正解となり，この「お化け」の本当の正体は，バス停にいる女の子（これから出かけるという分離不安のシンボル）の周囲に漂う分離不安の影であることをA子自身が連続的に表現していくこと（「開かれた関係性」への展開）が可能になったと考えられる．さらに，Thとしては，A子が表現した前言語レベルでの大きな揺れ動きを，今は「ことば」として表現させるよりも，上手に封じ込める（抑圧すること）ことが重要と考え，「えほん」に代えて，「おわり」にした．

このセッションを契機に，A子は二学期に入ると，「お化けの絵」を「友達」との情緒的な交流の「あそび」として，不安を昇華することが可能（Thとの「開かれた関係性」で獲得した防衛機制）となり，学校という環境での安定感を能動的に維持する防衛機制を身につけ，さらにThとの間主観的な関わりをきっかけとして，母親との分離不安という閉ざされた関係性から友達との新たな開かれた関係性へと発展したと考えられる．

2）B男の事例で，初回面接における「丸まった背中」という力動感を押さえ込んだ象徴的な姿は，強い印象をThに与えた．

その姿に対して，Thは無理に背筋を伸ばすこと（良い子の姿を無理して演じること）よりも，自然に背筋が伸びてくること（本来の力動感を発揮できるようになること）を表現できること）の方が重要であると感じた．同時にB男自身もそれができないための葛藤状態にあることが強く感じられたので，その揺れが「分かる」（間主観性）Thの印象をそのままの姿で今後の方針という「ことば」として言語化した．

すると，それにB男も気づき，初回面接の最後に，B男の「心の世界」にある罪悪感と孤独感のシンボルである「インコの霊」の秘密が，あたかもこれまでの対象関係（そこに起因する罪悪感）に強く支配されていたかのような「閉ざされた関係性」の世界を初めて自分自身で安心して言語化することができたようだ．

こうしてThとの間に形成され始めた新たな「心の世界」の中で，B男は身体全体（力動感）でThを試してくるようになり，そこで感じ取る安全感を基盤として，傷つきながら（能動性）も，一見平和な世界（無理して，良い子を演じている世界）ではなく，戦争の世界（Thと「本当の自分」を探すための自己との戦いの世界）を展開させていく方向に進んでいく．

こうした過程を踏まえて，B男自身は自分の罪悪感と孤独感とその根底にある「お父さ

ん」との関係性（閉ざされた関係性の源）をThとの間主観的な関係の中で洞察するあそびに展開して，ThはB男への信頼感もあり，B男の「偽りの自己」としての「置き引き」のことにも触れながら，B男のメッセージから受けるTh自身の感情をできるだけ間主観的に書いた（無言もそのままのメッセージとして）．それにより，B男はThとの「開かれた関係性」を獲得し，さらに友人関係を安心して成長させることができたと考えている．

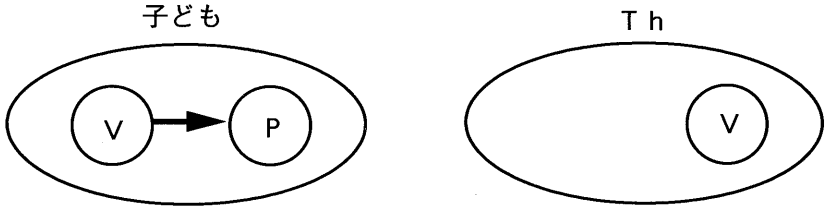
（2）「閉ざされた関係性」から「開かれた関係性」へ

上記の事例の考察から理解できるように，「心の世界」をカウンセリング的に展開させるためには，here and nowなクライエントとカウンセラーとの関係性が，常に「開かれた関係性」の状態にあることが重要である．

この「開かれた関係性」について，上記の2事例で示された「閉ざされた関係性」がもつ意味を十分に理解した上で，この「開かれた関係性」の理解につなげてみたい．

筆者が考えている「閉ざされた関係性」には図1に示したように，「心の世界」の混乱が生じるとその混乱を最少限にするために，自己の内部で活性化できなくなった力動感を一時的に取り入れる「仮の世界」が形成され，その力動感と「仮の世界」との閉鎖的な相互関係が継続している状態が「閉ざされた関係性」と考えている．

その「仮の世界」の存在は，一方では不安や悩みを生じさせるが，その一方では，この「仮の世界」の存在により，「心の世界」は一時的な安定感を保つことが可能となる．したがって，2つの事例においても，「お化け」や「インコの霊」といった象徴化された形で「仮の世界」を外在化することにより，安定感を保つことができている．



V：力動感　　P：仮の世界

図1：閉ざされた関係性

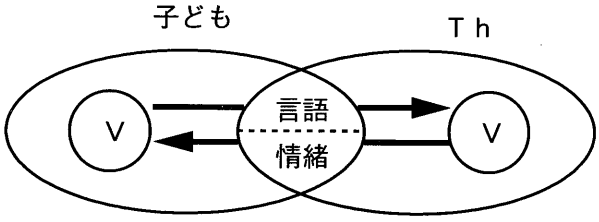


図2：開かれた関係性

しかしながら，こうした「仮の世界」は混乱を伴った情動レベルに強い支配を受けるために，言語（認知）レベルとしての「ことば」へと変換することが子どもでは特に難しい

と考えられる．そのために，情緒的な混乱状態（その結果としての外在化や投影）や身体症状といった情動レベルでの反応でしか表現できない場合が多いのではないだろうか．

こうした「閉ざされた関係性」が，本来の「開かれた関係性」への変化するには，図2に示したような，Th側の情動と言語（認知）とのバランスの取れた関与の仕方（これが間主観性と考えて良いが）により，クライエントの本来の能動性も発揮され，「開かれた関係性」への変化して、さらに「心の世界」が豊かに成長するものと考えられる．

（3）児童臨床における「あそび」について再考する

こうした考え方は，一方ではプレイセラピーにおける「あそび」がもつ役割を再認識する必要性を痛感させられる．

プレイセラピーは，我々の中で「一緒にあそぶこと」が重要であると考えがちである（この考え方そのものにあそびがないが）が，本来はチェシック（1999）が指摘しているように，「プレイ」では子ども独自の特質を探索することと「プレイの活用法」（ここではプレイとあそびを同意味語として理解する）が重要となる．つまり，カウンセラーの関わり方が重要であり，単に子どもの「あそび」を後ろから付いていくだけでは意味があまりないのである．

こうした積極的な「あそび」を活用した心理療法の考え方は，比喩的には「クライエントとカウンセラーが二人だけの「おもちゃ箱」を作ること」として，ある機会で報告したことがある．

この「おもちゃ箱」とは，他の人にとってはがらくたに過ぎない様々な物が箱に入っているだけにしか見えないが，子どもにとっては，カウンセラーとの相互関係の過程で，一つ一つの物に情緒的な体験が生まれ（力動感），さらにその感覚を楽しむ中で新たな体験が連続的に展開される（能動性）．そして，こうした全体を包む「開かれた関係性」を促進する間主観的な関わり方（箱の役割）が，がらくたを「おもちゃ箱」として意味ある体験の宝石箱に変えると考えられる．また，その際にカウンセラーがもつ理論的な背景は，実はこうした相互関係を活性化されるための治療者自身の「開かれた関係性」そのものであり，子ども達はカウンセラーの言葉や態度とともにこの「開かれた関係性」の豊かさをそこに感じ取っているのではないだろうか．

このように，「あそび」とは自然に変化するだけのものでなく，治療者側が力動感・能動性・間主観性の3点を中心におきながら，情動的にも認知的にも「新しい体験」（おもちゃ箱）をクライエントと共有することにより，クライエントはさらに，その「あそび」を新たな対象との「開かれた関係性」へと展開できるように変化してゆく．この一連の行為が本当の意味での「あそび」として，児童臨床の場面で「心の世界」へのアプローチに有効に機能するのである．

5．今後の課題

こうしたアプローチの考え方に到った最大の理由は、プレイセラピーがもつ心理臨床としての豊かな可能性を実証的に検証することが目的である。したがって、こうしたプレイセラピーを活用した児童臨床の技法が、さらにさまざまな心理臨床に応用できると考えているので、そうした応用について、さらに様々な事例を通して検討を重ねることが今後の課題と考えられる。

文　献

Axline,V. M.　1969　Play Therapy. Ballantine Books, New York.（小林正夫訳　1985　遊戯療法　岩崎学術出版社）

Chethik, M.　1989　Technique of Child Therapy－Psychodynamic strategies.（斎藤久美子監訳　1999　子どもの心理療法　創元社）

藤森和美　1999　子どものトラウマと心のケア　誠信書房

河崎道夫　1994　ファンタスティックなものの発達　発達，60号，32-39．ミネルヴァ書房

木谷秀勝　2000　プレイセラピーにおける治療的変化を促す要因に関する一考察　山口大学教育学部附属教育実践総合センター紀要　Vol.11，11-21.

厚生労働省編　2001　心的トラウマの理解とケア　じほう

鯨岡　峻　1997　原初的コミュニケーションの諸相　ミネルヴァ書房

鯨岡　峻　2000　養護学校は，いま－重い障害のある子どもたちと教師のコミュニケーション　ミネルヴァ書房

Manler, M. S., et a　1975　The Psychological Birth off the Human Infant: Symbiosis and Individuation. London.（高橋雅士他訳　1981　乳用事の心理的誕生－母子共生と個体化－．黎明書房）

三嶋博之　2000　エコロジカル・マインド－知性と環境をつなぐ心理学　ＮＨＫブックス　日本放送出版協会

村瀬嘉代子　1997　子どもの心に出会うとき　岩崎学術出版社

西澤　哲　1999　トラウマの臨床心理学　金剛出版

佐々木正人　1994　アフォーダンス　－新しい認知の理論　岩波科学ライブラリー　岩波書店

Stern, D. N.　1985　The Interpersonal World of the Infant: A View from Psychoanalysis and Developental Psychology. New York: Basic Books.（小此木啓吾他訳　1989　乳児の対人世界－理論編）

Winnicott, D. W.　1971　Playing and Reality. Lpndon: Tavistock Publications.（橋本雅雄訳　1979　遊ぶことと現実．岩崎学術出版社）

渡辺久子　2002　母子臨床と世代間伝達．金剛出版

山中康裕　1999　心理臨床と表現療法　岩崎学術出版社